

「宮田町今昔」

天王町々内会長

加勢 一郎

東海道神奈川宿を西に向かつて丁子家、田中家の御茶屋を左に見乍ら台の坂を登って下ると、そこはもう軽井沢、鶴屋町から芝生（旧名）を経て右側に浅間神社の高台を拝み乍ら浅間下に来ると、路が二つに岐れて右へ行けば八王子街道、真直ぐ来れば保土ヶ谷宿の入口の棒端俗に松原と謂うところである。この辺が今の宮田町である。

路が八王子街道と東海道に岐れるところの角に宮田町の旧家吉原家の弟さん俗に「角慶」さんと言う大きな乾物屋さんがあって毎日繁昌していた。又分岐点から少し八王子街道に這入った右側に「ドブクロ」屋さんがあり好きな人は良く買いに行ったものだ。

今松原商店街として賑わっているアノ辺一帯は大正十年前後は既に松はなく大きな夫婦榎が二本あって幹も葉も確つかり生育していた。附近には俗に安宿と言う宿屋が四・五軒、軒を連ね其の間を転々として当時の唯一の運送機関である馬力屋さん、二、三軒点在していた今の松原商店街の中心である。

筆者が帷子小学校六年を終えて保土ヶ谷小学校の高等科に通っていた大正十一年頃何処かで夫婦別れをした女がこの安宿に泊って身を避けていたのを後を追って来た亭主が無理に女を路上に伴れ出して榎の根元で女を殺し、自分も榎に短刀と共に打付けて無理心中をした、其の血が永く榎の根元に付着していたが聽て其の夫婦榎の一本が枯れると残った一本も間もなく枯れて終った。当時古老は「夫婦榎の無理心中と夫婦榎を結び付けて暫くの間噂が絶えなかった。」

八王子街道と東海道の分岐点から暫く来ると、今の十六号線に突き当る其の左側角に半鐘櫓があつて、昭和の一

桁頃迄立っていた、半鐘櫓の反対側の一角に筆者の母親の実家と其の一族の家が在った。今は様子が大分変わったが其の裏山一帯を俗に「デンピ山」と謂い、太平洋戦争当時横穴の防空壕を作つたと聞いている。

八王子街道と東海道と今の十六号線で区切られた地域が昔も今も宮田町だが——ただ戦争前は今の松原商店街の東側（浅間町寄り）は天王町で戦後宮田町に編入されたのである。筆者の母親から聞いた話では——明治の末頃は橘樹神社の裏側、八王子街道筋迄は田や畑で家が一軒も無かつたと謂う。